

# 大阪損保革新懇ニュース

NO. 70  
2005.11.7

大阪損保革新懇事務局  
大阪市中央区道修町三の三の十  
大阪屋道修町ビル3F 0666331105

## 品川さんの長編小説

### 『「習作」在りし日のあやしの詩（うた）』が完結

5年間20回にわたった長編小説

季刊雑誌『ほほこゑ』に2001年冬号から連載されていた品川正治さんの連載小説がこのほら完結しました。毎回2段組み平均15ページ、5年間20回にわたった長編小説です。自伝的な部分かなりの描写をたどると思われず。

私は「損保改革の会」発起総会や「同窓損保平和集会」の挨拶で、「品川さんは『ほほこゑ』という雑誌に自伝的小説を連載されている。筋の展開もゆるやかなが、格調高い文章が魅力的で、経済人であるにもかかわらず作家・文筆家の顔も持ちます」と紹介しました。品川さんは「本にするための複数社から話がきこえる」と言われてしまったから、この小説は「すれ出版せねえ」と思っています。

本になったあかきには、品川さんの講演での分りやすい語り口調はまた違って格調高い濃厚で重厚な文体に「この小説の「性・理性・感性・知性」がからみあつた巧みな構成と展開に読者が引き込まれる」と思っています。

この後半では品川さんが自身の詳細な自伝的人生を知る「あやしの詩」に「品川さんが今日も一貫して主張されている「日本と世界平和論」の原点・原型的発言も随所に発見することができるともこの小説の魅力だと思います。

『性・理性・感性のはざまを揺れ動く人間模様』描く「あやしの詩」を紹介します。全体の構成は大きく二つに分かれます。前半が『「習作」：序の章』の回、後半が『「習作」在りし日のあやしの詩（うた）』1-10回、計20回にわたります。

『序の章』第一回は銀行マンとして頭取・会長・相談役としての名をなした主人公篠原達也が「くくなった後、彼が残した40冊を越える日記の「習作」と表紙にある「ノート」の山を前にして妻の美也が「これを読み始めるところから物語は始まります。」「習作ノート」数十冊には彼が人間の性・知性・感性について正面から捉え、考えた内容が綴られています。

『序の章』20回以降の回まで、「日記」と「習作」の内容が引用されつつ、四人の女性、すなわち「くなくなった前妻」綾の生と性、妻「美也」との出会いと愛と家庭生活と性、美也の不倫・妊娠・中絶と達也の寛容、頭取時代の秘書「文」の大人のきざと「フタコ」ニックナフ、前妻との娘「香子」の海外での男遍歴の奔放な生き方と彼女との再会などを通じて、「人間・性・理性・感性・知性」などが美也の回顧と日常生活と重なるなかで語られていきます。銀行マンの人生らしくバブル破綻後の政治・国際・金融情勢や彼の見解なども随所に挿入されています。

言い方をかえれば、社会・家庭・愛・性の深淵をたぐる現代の性のあり方を問う小説、あるいは「性・理性・感性のはざまを揺れ動く人間模様」小説と言えるかも知れません。

かなりの自伝的要素があるのだから想像しなからず、『序の章』では「く」までがフィクションで、「く」までがノンフィクションか、判然としない複雑・巧妙な構成に感服させられています。

二度と戦争はしない、未来永劫、戦争をしない  
連載第10回からの『「習作」在りし日のあやしの詩』は『序の章』から一転、品川さんの自伝的色彩が濃厚と思えるような内容になっていきます。すべてが具体的に、到底フィクションとは考えられない記述が続きます。

10回から11の章 大陸の戦場へ その1』が始まり、14回まで『その四』まで続きます。主人公の家族のこと、少年・中学・高等学校時代のことから召集、戦闘の模様、終戦、帰国の模様が詳しく回想されます。中学時代に日本文学・詩歌・外国文学を読み漁り、クラシック音楽・映画などにも惹かれ、友だちの姉さんとの淡い恋心、卒業式には生徒代表として挨拶したこと。そして京都の第三高等学校への入学、充実した学生生活の日々、哲学への関心の傾斜、全校生徒総代への選出、弁論部活動、弁論部浅井君の軍部批判比喩論から大問題の発生と生徒代表として引責休学、家のお手伝い美代さんから寄せられる甘い感情、一兵卒としての志願から入隊戦場派遣、戦闘の模様と終戦。そして帰国。5回にわたって主人公の昭和10年代から終戦までの模様が確かな記憶と感性豊かな記述で再現されています。

もっとも印象深いところは、彼が帰国直前、俘虜収容中にガリ刷り雑誌の編輯を担当し、「創刊号」に「終戦—日本は二度と戦わない」という一文を載せるところです。

「国家は固有の国土と国民の生命を守ることを越えて武力を発動するのは許されない。他国を侵略する大義なほあり得ない。戦争とは他国兵を殺し、自国兵を殺すことである。敵・味方ともに兵には親・子・妻・兄弟たちの生活と愛情が十重・二十重と絡んでいる。戦争の形態は所謂「総力戦」になり、前線と銃後の境なく、すべての国民が生命・財産の危機にさらされ、すべての自由を失い、人格も人権も「戦争遂行」『勝つため』の価値の前では当然のように無視されるというまことに露骨な非人間的な世界に閉じこめられることになった。…一度や戦争はしない、未来永劫、戦争をしない、二度と他国に兵を出さない、との決意の表明として『終戦』と呼ぼう、少なくとも私は『終戦』の決意を一生抱いていきます。」

教育も「ロスターマン」

第一の回から『11の章』が始まり、第20回『11の章』の「六」で閉幕する。

11の回は彼の復讐後、故郷・神戸の戦後混乱状況のなかでの生活、上京して東大法政部学生としての勉強と生活が語られている。すでに既婚者の人の子ともなっている旧知の牧野綾との再会、愛の進行、綾の離婚と達也との結婚について恋愛・離婚・結婚・結婚生活・綾の妊娠などを通じ、「習作」のテーマである「家庭・性・愛・理性・感性」がからみあがり物語は進行していきます。相当なわづらひの記述に驚かされるような場面も出てきます。

同時に、彼は結婚後の生活安定のために大学在学中ながら社会で英語を教える中学の先生になる。『11の章』は教育も「ロスターマン」のテーマである。

彼は教員としての職務はすべて離脱するのですが、大学卒業のため必要な単位をとったので試験をまっぴら受けつけていなかったため最終年度にふたつの単位をこなす必要になります。そのため同一時間内での試験を受けなければならないという縛りを受け、単位を取得します。11の回は「レスターマン」のテーマである。

第20回最終回は、彼は友人の小林君宅を訪問した際に神戸時代の先輩の山本君と小林君が「党活動で入会を組んでる」といふを知ります。3人は再会、山本君は「篠原は君の信条をおりまわす」、組織の外からの意見を聞ける絶好の相手になったといふこと言われます。11の回は暗示的といふ。

それを許さない、戦争もさせないのも人間だ

彼は無事入学が卒業できる単位を取り、中学の終業式も終わる。クラス全員は彼を待っている。「篠原先生、先生の戦争の生(なま)の11の体験を聞かせてください」といふ。その瞬間に「だんて、篠原は次のように語ります。

「私は今日で退陣する。戦前、戦中、戦後の歴史について私は教科書を離れて、君たちの将来、この国の未来について大切に思っている」といふ。私は連長へ戦死を免れた男だ。諸君の中にはお父さんと、兄弟が戦死された人がいる。ほとんどの方があの戦争の空襲で悲しい思いを味わったはずだ。それだけじゃなく、日本軍はマンダンのような軍に攻め込まれ、その兵隊だけじゃなく、住民を何千万人殺したり、傷つけたりしている。私が戦った中国は瀋陽事変から数えるところ5年間、日本に苦しめられてきた。日本軍に殺された人たちは、親も、兄弟も、子も、お父さんだ。戦争は怖いものはない。戦争は国民を苦しめる。悲しいものはなく戦争は世界に不幸をもたらすものはない。この戦争は軍や政府の言いなりで本心に止むのかどうかは随分頭を使い、読書や友人たちと議論も重ねた。が自分を納得させないが、ききながら「招集」で戦った。ただ、「大日本帝国」は個人として絶対だった。国家対個人としての見ると国家は絶対だった。国家が戦争を始めた以上、個人は戦わねばならぬ

かった。命を捨てなければならなかったし、敵を殺さなければならなかった」

「戦争を起したのは国家だ」と思い込んでいた。しかしそれは違っている。戦争を起すのも人間だし、それを許さない、戦争もさせないのも人間だ、と私は信じている。世の中には紛争の種は絶えないでしょう。世界で戦争の種は絶えないでしょう。民族・宗教・政治体制の違いのために起る紛争はなくなることはない。でもそれを戦争で解決しようとするのも人間だし、武力解決しないこと決めるのも人間です。人間といえば抽象的に聞きますが、具体的に主権者である国民、選挙で一票を行使する有権者が決めるのです。新憲法は国民が国の主権者であると書いてあります。九条には、戦争は絶対にしてはいけない、そのため陸・海・空は持たない、国の交戦権はこれを認めない、世界ではじめて宣言しております。君たちはこんな時代、こんな国にめくられたのです。

何千万に及び犠牲の上に生まれたこの憲法を精神を守り、これを実現しようとするのが私だから私だ、と胸を肝に銘じたい。戦争で失ったものはあまりにも大きすぎます。取り返すことはできません。戦争や空襲でなくなった人の分まで頑張らなければならない。遺された人の役目です。その人たちの悲劇を無にしないというのが憲法九条の精神です」

11の話に生徒たち全員は感動して泣いた。感謝の言葉を書いて篠原に渡す子どもたちもいた。最後に「みなは「仰げば尊し」を歌って達也と綾は11の日の感動を振り返りながら生徒のお母さんかやってくる屋台の夕食、そのお母さんの再婚の話聞きながら二人は祝福する。翌日、法学部事務長から彼の就職について自分に任せたいという手紙が届く。

最後の一行は「達也の人生は11の曲がり角を過ぎた」といふことなりました。

私は戦後教育のなかで口語体・文と並用漢字中心に学んだ世代です。戦前のスパルタ的中学と第三高等学校で学んだこと、文学・哲学・少年青年が描く硬骨・骨太の文体とハードな漢字・熟語を駆使する小説を読み進めることにはかなりの緊張がともなっていました。そのため全巻を通読して、品川やたは日頃の経済人としての発言だけではなく、現代社会の家庭・愛・性・理性について思索をされていることを「習作」として小説として発言・発表されたのだと思います。

わたしたちは憲法の条改憲の政治情勢が弾まるなか自らの戦争体験から平和の条を改定しようの大切さを発言され続ける品川さんを3度も講師に招くようになったことを誇りに思います。品川さんの「健康と生活」を折る、私の『習作』品川小説の随筆的感想』に代える次第です。この本が10月早く出版されることを期待します。

野村英隆